
ゲームの中で

レオンハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームの中で

【Nコード】

N8684L

【作者名】

レオンハート

【あらすじ】

ゲームの中に入ってしまった。

頭より先に体が動く幼馴染み。

場に流されやすい親友。

訳のわからない綺麗な人。

俺は一体、何をどうしたらいいんだ！！

正当継承者達

下校途中、近道で路地裏を通ろうとしたのがまずかった。

そこはすでに不良の巣窟になっていた。引き返そうとしたら、左肩を掴まれこう言われた。

「おい、金出せよ」

今日は週一の食材買いだめの日だ。おかげで今財布には一万程入っている。

これを取られたら俺の一週間はパン一斤になる事必須。

だが、逃げようにも肩を掴まれて動けない。

はぁ、面倒臭いが仕方ない。

肩を掴んでいる奴の足をおもいつきり踏みつける。

悶絶し、肩から手を離れた所で回し蹴りを入れる。不良共が目を白黒させている、中々良い光景だ。

「いい度胸だ。野郎共やつちまえ！」

不良のリーダー格みたいな奴が命令を出す。すると、リーダーを除く三人が襲いかかってきた。

まず先頭にいる奴にハイキックを入れ気絶させる。

続いて左翼にいた奴に鳩尾に膝を入れこれまた気絶させる。

最後……といたい所だが、すでにリーダーの後ろに隠れてしまっていた。

リーダーの後ろと言ってもすでにリーダーもドラム缶の後ろだ。

「まだ何かあるか？」

威圧感をたっぷり入れ聞く。

「何も無いです！ すいませんでした！」

不良達が土下座してきた。ここまでしなくていいんだが。

「もうこんな事するなよ」

「はい、すいませんでした！」

深々と頭を下げ俺を見送る不良達、気分は実に晴れ晴れしていた。

路地裏を抜けて数分、もうすぐスーパーに着くか、今日の飯どうすっかなあ。

「おーい、隼人」

「ん？」

声を掛けられた方をみると、よく見知った顔があった。

百七十センチという平均的な身長と整った顔立ち。そしてオールバックの髪型をした俺の親友がそこに居た。

「何かようか？」

「一緒に帰ろうかと思ってさ」

俺はこれから買い物があるし、それに……

「お前、今日稽古だろう」

「……………あ」

どうやら完全に忘れてたらしいな。まったく、『蓮堂流弓術』の正当継承者ともあるうものが。

「じゃ、じゃあまた明日！」

「おう」

いうやいなやダッシュで帰っていった。

あいつの親父さん厳しいからな。この前受けた罰は、五十メートル先の的を一万回射るまで飯抜きだったか。

あいつも苦労してるんだな。

スーパーの中に入り買い物かごを取ろうとしたその時。

「あれ？ 隼人君？」

またか、と思いつつ振り返ると、また見知った顔があった。

「真樹か」

ポニーテールの髪型に、ぱっちりとした目。世間一般で言う美少女が立っていた。

「あ、そう言えば今日は買いだめの日だったね」

中学生の頃から同じサイクルで暮らしてるから、すでに周知の事実なのだろう。

というか幼馴染みだから知っているのは当たり前か。

「毎週毎週大変だね。」

「そうでもないさ、一人自由気ままに生活できるからな」

一人暮らしは便利でいい。料理をする時は自分の気分で決められるし、どうしても面倒な時はコンビニ弁当にできる。

ただ掃除や洗濯は少し面倒だが。

「うん、あ、そうだ！ 隼人君さえ良かったら、今度何か持つて行こうか？」「おお、そいつは助かる」

「わかった。じゃあ今度何か持つていくね」

「よろしく頼む」

これで少しは食費が浮く。まあ、浮いた所で欲しいものがなどないが。

「うん、それよりさ」

「何だ？」

真樹が上目遣いで俺を見てくる。

俺は知っている。この状態の真樹が何を言うのか。

「練習試合、しない？」

「嫌だ」

練習試合とは言えほぼ実戦に近い。しかも真樹は戦闘狂の気質がある様で、試合が始めると笑いながら突進してくる。

その状態の真樹はかなり怖い。

「なんで？」

頬を膨らませ、玩具を買って貰えない子供の様に駄々をこねる。

「うるさい！ お前の戦闘狂に加え『及川流古武術』でこられたら、誰でも逃げだすわ！」

そう、問題は『及川流古武術』にある。あれは相手の懐に一瞬で入り、連続で打撃を与える、と言う武術だ。

しかも只の門下生ならともかく、正当継承者なので実力は折り紙付きである。

ちなみにあそこの道場に掛けてある掛け軸の文字は、雷鳴より疾くと書いてあった。

「むゝ、昔はよくしてくれたのに、しかも最近、前とは違って刀何
か使い始めて手応えが無さすぎるんだよ」

「たまにでいいだろ。それに武器は俺の勝手だ」

前とは違ってもそれなりに刀（勿論刃引きされてる）の腕はある
はず何だが。

それでも真樹は足りないらしい。

「ねゝえゝ、明日で良いからやるゝ」

「妥協して明日かよ！」

全く、付き合わされるこっちの身にもなって欲しい。

ここは物を与えて諦めて貰おう。

「今度何かおごってやるから、また次の機会にしてくれ」

「ふん！ 私はそんなに安く無いんだよゝだ」

どうするか、こうなった真樹は中々機嫌を治してくれない。

うゝん、手痛い出費だが仕方がない。

誘いを断った俺も悪いんだし。

「じゃあ、今度お前の欲しいゲーム買って良いから」

ゲームの真樹はこれで機嫌を直すはずだ。

どれくらいゲームかというと、稽古をさぼって格闘ゲームのそ
れなりにでかい大会に出場し、優勝したぐらいだ。

見た人の話では全てパーフェクトだったらしい。勿論、その後師
範代から罰を受けたらしいが。

「ほんと！？」

「ああ」

「やったあ！ 約束だからね」

「わかった、わかったから少し落ち着け」

ゲームを買ってやるといった瞬間、跳び跳ねて喜ぶので目立ちま
くっている。「ん、ごめん、それじゃあね、隼人君」

「ああ」

すっかり機嫌を治した真樹はスキップしながら店を出ていった。
明日から貧乏生活がしばらく続くな。

そんな事を考えながら買い物かごを手にするのだった。

正当継承者達（後書き）

感想、助言、お待ちしています。

嫌な休日

「ひまーだ」

周がそんな事を言い出した。

いきなり家に来て、勝手に上がった挙げ句、そんな事をほざきやがった。

「帰れ」

当然だと思う。許可も無しに家に上がるなど俺は許さん。周には『親しき中にも礼儀有り』ということわざを、教えなければならぬ。

考えを実行しようかと思い、席を立とうとした、その時

『ピンポン』

チャイムが鳴った。

おかしいな、今日は誰とも約束した覚えは無いんだが、勿論周とも。

「はい。」

宅急便か何かと思い、ドアを開けると

「こんにちは、隼人君」

真樹が居た。

なぜ俺の友人は何の連絡も無しに家に来るんだ……

「あれ？ 真樹ちゃんじゃないか。そんな所で立ってないで上がりなよ」

「お邪魔しまーす」

周が家主の許可なく勝手に家に上げやがった。

「おい！ ここは俺の家だぞ！」

そんな事お構い無しに靴を脱ぎ、リビングに進んで行く。

はあ、もういいや。

「真樹、周、何か飲むか？」

「あれ？ 随分歓迎してくれるんだね？」

「どっかの誰かさん達が好き勝手やってくれたせいで、軽く自棄になっただけだ」

二人は目を逸らし沈黙する。その沈黙は反省と受けとっておこう。「ね、ねえ隼人君、周君、私ゲーム買ったんだ」

真樹が無理矢理話題を変えようとしている。まあ、これぐらいで許してやるか。

「どんなゲームだ？」

真樹が安堵の息を漏らし、説明を始める。

「えっとね、とにかく不思議なゲームなんだよ」

「何が？」

周が危機を脱したのを感じ会話に参加する。

「パソコンで調べても何の情報も載ってないの」

それは確かに不思議なゲームだな。普通なら攻略法の一つでも出てくる物だが。

「で、どこでそれを手に入れた？」

そんな訳のわからない物が一般のゲーム店に置いてある筈がない。

「私がゲーマーなのは皆知ってるよね？」

「ああ」

「勿論」

真樹と一度でも話をした事がある奴だったら誰もが知っている。

世間話をしようにも必ずと言っていいほどゲームの話になるからな。

「最近出たゲームはぜんぶやり尽くして、昔のゲーム機は家には無いの」

驚いた、てつきり古今東西全てのゲーム機があるのかと思ったが。「それで私は行き着けのゲームショップの店長に話を付けて協力して貰い、独自のルートを手に入れる事に成功しました」

「おい、ちよつと待て」

まず何で店長が協力した。そして独自のルートとはなんだ。ヤバイ事に足突っ込んでないだろうな？

「心配ご無用！ 店長に浮気をばらすと言って脅してるだけだから心配するわ！ 浮気で脅す何てそんな恐ろしい事恨まれて当然、一介の店長がヤバイ事に足を踏み入れているとは思えないが。」

独自のルートを作れるぐらいの力があるのだから、それなりに裏の権力は強いのだろう。

「はあ、それで？」

幼馴染みだからよくわかる。真樹がこう言う時はいつも…

「早速やらない？」

こうなる。

「断る」

「やる！」

こいつらッ！勝手に家に上がったくせにまた勝手にゲームを始める気か！

「多数決により隼人君の意見は、棄却されました」

現時点で家主の権力は無いに等しい。家主なのに。俺がショックを受けている間に、ゲームの準備は進められて行く。おい、そのゲーム機どこから出した。

「起動！！」

もういいや、ゲームは横から見れば良いだろう。

そう思ったのも束の間、一瞬で光に視界を奪われた。

嫌な休日（後書き）

感想、助言、お待ちしています。

整理させてくれ

「……………うん？」

目を開けると、そこには見たことも無い景色が広がっていた。

石造りの広大な町に、賑わう人々、さらには目の前にでかい袋があった。

「……………何だろう、これ？」

真樹と周の声が重なった、あいつらは現状より袋の中身の方が気になるらしい。

「どこだここ？」

俺の問いにも答えずに、人目も憚らず袋をあさり始める、まあ答えようとした所で無理だと思うが。

「あれ？ これは……………」

またハモリやがった。

「何か見つけたか？」

真樹と周が無言で見つけた物を物を見せてくる。これは……

「グローブと……………弓？」

しかも真樹と周の愛用の物だった。

「なあんだ、もっと面白い物期待したのに」「そうだね」

二人が愚痴を垂れているが、使い慣れた物の方がいいだろう。

しかし、なぜこんな物が置いてあるのだろう、それに一体誰が？

「隼人君のは？」

なんでこいつは袋の中身しか興味が無いのだろう。普通は何でこんな所にいるのかとか、疑問に思うはずなんだが。

「ちよつと待て」

さつきから、道行く人に奇異の視線を向けられて、もう恥ずかしさが半端では無い。

大通りの端に行き、袋の中を確認する。多分、袋の中身はそれぞれに見合った武器と見ていいだろう。

とすると俺は……

「やっぱり、か」

そこには無骨な鎌があつた。芝刈り用の小さな鎌では無い、それこそ死神が持つ様な鎌だ

もう、捨てたはずの代物なんだがな……

「やっぱり、隼人はその武器が一番似合ってるよ」

「そうだね、隼人君は鎌の方が闘い甲斐があるよ」

人の気も知らないで、好き勝手言いやがって。まあいい、こんな物があるということは、何かしらと闘うという事だろう。

「ここどこ？」

「今さらだな」

袋の中身しか興味が無かつた真樹も、やっと現状を不思議に思つたらしい。

「俺もわからんが、こんな物があるんだから、何かと闘えということじゃないか？」

「うゝん、魔王を倒せとか？」

「そんなゲームみたいな事があるか！」

そうだ、そんな事ある訳が……

「ようこそいらっしやいました、隼人様、周様、真樹様」

「……え？」「……」

俺達の背後から聴いた事が無い声が聴こえた。

驚き振り返るとそこには、女性が立っていた。

腰まで伸ばした艶やかな髪、すれ違つたら誰でも振り返る美しい顔立ち、いや、美しいなどという言葉では足りない、まるで女神の様な女性が立っていた。

「ど、どうも……」

困惑から復活し挨拶する。この人に話かけられたら誰だって困ると断言できる。

「ふふ、畏まら無くて結構ですよ」

「そういう訳にはございません、目上の人には敬語を使うのは当た

り前でしよう?」

やっと調子が戻ってきた。年上に敬語を使わないほど、俺は礼儀知らずじゃない。

「ふふふ、本当に面白い方ですね」

「それほどでも、所で一体あなたはだれですか?」

少し殺気を込めて言う。いつまでも見ず知らずの人と面白可笑しく話す訳にはいかない。

「私の名前は　です」

「ん?　すみません、もう一度お願いします」

聞き逃してさらにもう一度質問するなど失礼の極みだが、答えてもらおう。

「いいんですよわからなくて、名前は進めて行くうちにわかりますから」

「何をですか?」

「物語をです」

言っている意味がわからない。物語を進める?　何を言っているんだ?　この人は。

「それってどういう……」　「それでは私はこれで。ああ、それと注意してください。この世界は死んでも生き返りませんので」

「だからどういう……」

言いきる前に消えてしまった。目の前にいたのに、元からいなかったかの様に存在感が一瞬して無くなった。まあ、もう目の前に存在していないのだが。

「何だっただんだろう、あの人」

周が疑問を口にするが、そんな事聞かれても、俺も真樹も答えられないはずがない。

「んゝとりあえず外にでてみる?」

事態を把握したのか、真樹が提案を出す。

「このまま、ずっと考えてても何も変わらないでしょ?」

確かに真樹の言う事も一理あるが、状態の整理が先だ。

「レッツゴー!!」

遅かった、二人の意見など知るか、とでも言うようにずかずか歩いて行ってしまう。周はかなりノリノリだ。ふと真樹が立ち止まる、どうしたんだ？

「外って……どこ？」

はあ、まったくこいつは……

整理させてくれ（後書き）

感想、助言、お待ちしています。

初めての敵

真樹が張り切ろうとしたが、この町がどういう構造をしているかもわからないので、調べる事にした。

「さて、とりあえず適当に見て回るか」

大通りを出て辺りを見渡す。うーん、特に目に止まる物はないなあ。

というか民家しか周りに見当たらない。

「何も無いね」

「何かあっても困るがな」

武器屋やら防具屋やらあつたらさらに訳がわからなくなる。

とりあえず此所が俺達がいた世界では無い事は理解した。

一瞬で転移できる物なんて家には置いて無いしな。置いてあつたらかなり便利な品物になるが、現代科学で一瞬で転移できる何て聞いたことが無い。

「あ！ あれ門じゃない!？」

「ん？ ああ、そうみたいだな」 百メートル程先に門らしき物があつた。かなり大きくて重厚感と歴史の深さを感じさせる。

「じゃあ、早速行ってみる？」

「目的は町の散策だぞ」

真樹が提案を出すのが却下する。ただでさえこんな所にいきなり飛ばされて混乱してるんだ。

町の構造すら理解していないのに、外に出るなど愚の骨頂。

行き当たりばったりなど俺は許さん。

それに今の目的は町の散策だ。多分、外に出たら敵やら何やらが出てくるのだろう。

そこまではいい、敵は倒せば問題無いからな。だが、真樹の戦闘狂はそうはいかない。

あの状態の真樹はときどきトリップして戻れない事がある。

そうになると、対処が至極面倒くさい。「ちょっとだけでいいから、お願い！」

「いいよ！」 「却下だ」

「多数決で外に行くにけつてーい」

畜生！ またか！ また多数決によって俺の意見は無しにされるのか！

「レッツゴー！」

「オー！」

はあ、もういい諦めよう。

多少、町の散策を中断しても問題は無いだろう。

などと考えている内に周と真樹が番兵に話をつけ、今まさに門が開こうとしていた。

「ちょ、ちよつと待ってくれ！」

「早く早く」

まったく、やる事だけは早いなあいつら。

門を無事に抜け目の前に広がった景色は、一面草原だった。

「うわあ」

都会では見れない景色に真樹が感嘆の声を上げる。外に行くのは反対していたが、この景色を見ただけでも来てよかったと思える。今までで一番美しい光景だろう。そう断言できるが、無計画に外に出ていいという事にはならない。

「んで、どうするんだ？ まさか何の考えも無しに、外に出て来たんじゃないだろう？」

こんな訳のわからない世界に来ておいて、無闇やたらに行動するなど自殺行為に等しい。

「え……………も、勿論だよ！ そ、そう！ 視察だよ、視察！」

はあ、また何も考えないで外に出たのか……

大体予想はついていたが、当たって欲しくない予想だった。

「じゃあその視察を始めるか」

「うゝ、隼人君の意地悪」

誰が意地悪だ、まったく失礼な。俺ほど紳士的な人間は少なくとも同年代にはいないはずなんだが。

「町の周りを一周したら戻るぞ、いいな？」

「はい」

真樹が不満の声を上げるが奴にそんな権利は無い。さて、歩き始めるか。

「何も出ないね」

真樹がそんな事を呟くが別段、何も起きない。

「あ、変なのめっけ」

「ん？」

周が指差す方向に目を向けると、猪が六本足になった様な生物が遠目に十匹程居た。

「じゃあ周、あいつら殺っちゃって」

「いいけど、一回に倒せるのは多分、三匹ぐらいだよ？」

「三匹も殺れば十分だ」

「オツケー、じゃあちよつと待って、あと戦う準備しといてね」

「わかった」

周が弓を取り出し構える、これを見たら、誰もが思うだろう。こいつ以上に弓を扱える者はいないと。

静寂が世界を支配する。次の瞬間『パシュ』と音がし、正確に猪の頭を射抜いた。

すると猪がこちらの存在に気づき一斉にこちらを向いた。

「やっぱ、そうなるよなあ……」

周がそう愚痴を垂れている間にも、矢を射ている。

二匹目を射抜いたと同時に突進してきた。距離があるので到達するには五秒程掛かるだろう。

周が先頭の猪を射抜いた所で、弓の距離では余裕が無くなってきた。

「ごめんね、僕はもう活躍できそうにないや」

「十分だ、よつと！」

突進してきた猪の頭を横に薙ぐ様に突き刺し、絶命させる。ピシヤツと血が顔につぐが気にはしない。

突き刺したまま猪の死体を振り回す。すると、突進してきた二匹の猪がモロに食らい、倒される。

鎌を引き抜き、鎌を地につけそのまま引く、倒れた二匹の猪の首を落とす、次の猪に備え構えると、すでに戦闘は終わっていた。

「遅いよ、隼人君。しばらく使って無いから腕鈍ったんじゃないの？」

腕と足を血まみれにした真樹が非難してきた。

確かに腕はかなり鈍っている。前までならこんな物一瞬で終わらせた筈なんだが。

「感覚は追々取り戻すさ。ん？」

猪の死体が溶けて、コインの様な物が出てきた。

「何だこれ？」

コインを手に取り見てみる。この世界の通貨だろうか、わからないが、取っておいて損は無いだろう。

「さて一周したし町に戻るか」

「うい」

「はい」

門を開けて貰い、町に入ると番兵が驚いた顔をした。

仕方ないかさつき出ていった、少年少女が血まみれで帰って来ただから。

「ああ、ごめんなさい」

真樹が一度外に出て血を払う。いや、そういう意味じゃない。

「すいません、宿屋ってどこですか？」

とりあえず宿屋の場所を、動揺している所申し訳ないが、教えて貰おう。

「ありがとうございます、おゝい、真樹！ 血はもういいから宿屋

行くぞ！」

「はーい」

真樹の間延びた声が聞こえ、宿屋に向け歩きだす。

「いらつしゃいま……せ」

「三人で」

「か、畏まりました。103号室になります」

「ありがとうございます」 鍵を受け取った時、受付の人が震えていたが、しょうがないだろう。血まみれだし。

「はあ、疲れた」

鍵を開け部屋に入る。豪勢とは言えないまでも、きちんと整備された部屋。

中央には大きい丸テーブルが置いており、存在感を何より醸し出している。

俺は一直線にベッドに飛び込む。ああ、気持ちいい。

「あれ、もう寝るの？」

「ああ、久しぶりにあれを使って疲れた。悪いがあれの手入れしといてくれ」

「いいよ、わかった」

「よろしく頼む」

目を閉じると、疲れていた俺の体は、すぐに夢の中に入っていた。

初めての敵（後書き）

感想、助言、お待ちしています。

金集め（前書き）

切り替え視点です。
読みづらいかもしれません。

金集め

「……きて、起きて、隼人君」

「……うーん」

「あ、やっと起きた」

朝は憂鬱だ。

太陽が光り輝き始め、人々に朝を伝える。

日光を浴びて、一日頑張ろうと思う奴もいるだろうが、俺にとって日光は邪魔でしかない。

起きようとしても日光のせいで、その気が無くなると言っても過言ではない。つまり何が言いたいかというと

「……二度寝する」

「いい加減にしろーい！！」

周に布団をひつpegされた。何て事するんだこいつは！

俺の憩いの時間を邪魔するとはいい度胸だ。

「どうるああああ！！」

ひつpegがされた布団をひつpeg返し被る。

いいじゃないか。もうちよつとぐらい、寝かせてくれ。

「隼人君？ いい加減にしないと怒るよ」

殺気をこれでもかと込められて言われる。

殺気だけで殺せるなら、すでに俺は惨殺死体になっているだろう。というかこのままでいたら、殺される勢いだけだね！

「……はい、起きます」

不満はあるが仕方ない、起きるのと命を天秤にかけたら命の方が圧倒的に重い。

「よしよし、偉いね隼人君」

「……止めてくれ」

頭を撫でるな、そして周、その百点を取った息子を見る様な目で見るな。

「ふぁーあ、じゃあそろそろチェックアウトするか」「その前に隼人君はシャワー浴びてきてね」

ああ、そういえば昨日はすぐ眠って、血を洗い流して無かったな。「わかった、少し待っててくれ」

そう言い残し風呂場に入り服を全て脱ぐ。

シャワーから湯を出し置いてある石鹸で洗って行く。頭を洗う。

こんなもんだろう、適当に体と頭を拭き、風呂から出る。

洗面所の鏡を覗くとまだ顔に血が残っていた。

面倒くせえな、と思いつつ顔を洗い始める。

適当に洗顔をし、もう一度鏡を覗くと、血が乾いてこびりついてしまっていた。

それから五分間こびりついた血と格闘し、勝利した。

「遅かったね」

「こびりついた血が強敵だったんだ」

「ふーん、じゃあ隼人も来た事だし行こうか」

「はい」「おう」

部屋を出て気づいた。

「金持っていない……」

ヤバいこのままじゃ、俺達は犯罪者に成り下がってしまう。

だが、ここに来たばかりで稼ぎ方も判らないし、流通通貨も知らない。

考える……この状況を打開する方法を！

「心配しなくていいよ。ここは私が出したげる」

ん？ 何でだ？ 真樹も俺もこの世界に来たばかりで、知識も金銭的にも俺と同じのはず何だが。

そんな心配をよそめに、チェックアウトを済ませて行く。

「ありがとうございました」

昨日とは違う受付嬢が営業スマイル満開で、俺達を送り出す。

「なあ真樹」

「ん？ 何？ 隼人君」

「金はどうした？」

「えっとね、実は」

「恐喝でもしたのか？」

「しないよ！ そんな事！」

やりかね無いから言っただけだな。

「昨日、猪を倒した時にコインみたいな物が出てきたでしょ？」

「ああ、これか」

ポケットからコインを取りだし、真樹に見せる。

「うん、それ一枚で大体千円くらいだね」

「そうか」

これ一枚で千円か、随分簡単に手に入るんだな。

にしても化物殺して金が出るのか、まるでゲームだな。

そこまで考えてふと疑問が出てきた。

ここは本当にゲームの世界じゃないか？

今考えれば、真樹が持ってきたゲームを起動した瞬間に、原理は知らんがこんな訳のわからない世界に飛ばされた。

「隼人君？」

あの綺麗な人も、物語を進めれば、と言っていた。 物語とはゲ

ームの中の、という事か。そう解釈すれば理解できる。

「おーい、隼人」

「ん？ ああ、すまん少し考え事をしていた」

「そっか、それでこれからどうする？」

これからの事などまったく考えて無かった。

金集め？ それとも次の町を目指す？ うーん、今日は金集めにするか。いくらあっても困る物でも無いし。

「よし、今日はモンスターを狩りまろう」

「はい」「うい」

全員の意見がまとまった所で、早速門まで行き、開けて貰う。

昨日と同じ景色が目の前に広がる。一面草原という美しい光景だ。
「さて、今日は皆バラバラになって効率を上げる、太陽が天辺にき

たらここに集まる事、いいな？」

「はい」「うい」

「それじゃあ解散！」

真樹は北へ、周は東へ、俺は西へ歩き出す。さて、いくら稼げるかな。

隼人視点

歩き始めて五分かそこら、遠目に早速見つけた。人に似た剣を持つ化物が五匹いる。

さて、それじゃああいつらの後ろに回り込んで、急襲を仕掛けるか。

草の陰に隠れて奴らの後ろ姿から、約二十メートルの所まで近づく。まだ大丈夫か

十メートルの所まで気配を消して近づく。よし、まだ気付かれていない。

俺は一気に走りだし、化物の首を落とそうと、鎌を大きく振りかぶる。こちらに気づいて振り返った時にはもう遅い。二体はなにも出来ずに死んでいく。

他の三体はすでに戦闘態勢を取っていた。

「面倒くせえな」

一人言を呟くが、それで相手が大人しく殺される筈がない。

『ガアアアア！』

と野太い声を上げて大上段に斬りかかってくる。

それを難なく避け、横から化物の首を刈る。遅い、遅すぎる。真樹と比べたら拳銃と亀だ。

残った二体も斬りかかってくるが、剣を振らせなどしない。奴らが振り下ろすのより速く鎌を横に薙ぎ、胴体と足を別れさせ

る。

やっと終わった。さてとそろそろ死体が溶け始める頃か。

おお、出てきた出てきた。昨日と同じように溶け出し、中から硬貨が出てくる。

「よし、じゃあ次行きますか」

誰も聞いていないであろう一人言を呟きながら、次の獲物を探し始めた。

周視点

あれ？ よく考えたら僕弓だよな？

後方支援が主体なのに大丈夫かなあ……でも昨日みたいに動きの早いモンスターじゃ無いなら何とかなりそう、かな？

うーん、うじうじ考えてても仕方ない、その場その場で対応しなければならなくなるさ。

臨機応変に、うんこれで行こう！

よし、頑張るぞ！ どんな敵でもバッチこい！

「出ない……」

意を決したはいいが何も出てこない、ううこのままじゃ二人に差をつけられちゃうよ。

あ、やっと見つけた、槍を持った人型のモンスターが五匹いる。

僕は遠距離だから関係無いけど。

動物じゃ無いなら遅れは取らないね、余裕だよ。よし、早速倒そう。

弓を取り出し構える。ちょっと距離があるけど問題無い。

風速……OK、照準……OK。『パシュ』と聞き慣れた音がし、

モンスターの頭を的確に射ぬく。

仲間がいきなり倒れ混乱をしているが、もうすぐ自分も同じように死ぬ事など知るよしも無い。

『パシュ』二体目の頭を射ぬいた所で、こちらに気づいた。
「意外と賢いんだ」

どうやら飛んできた方向をたどって気づいたらしい。

「じゃあちよつとだけ本気出しちゃおうかな」

弓矢を三本取り、引き絞る。『パシュ』いつもより力強い音が鳴り、見事三体の頭に命中した。

こんなもんかな、弓をしまい、モンスターの死体に歩み寄る。

死体が溶け出し中からコインの様な物が出てきた。よし、まず五千円。

よし、この調子で次も頑張るぞ！ オー！

真樹視点

『グシャ』最後の人型モンスターの頭を叩き潰す。あはは、楽しいなあ。

あ、見つけた、さっきと同じ人型かあ。手応え無かったけどまあいいや。

さっきと違って量があるし、剣も持つてる。ん、大体十匹ぐらいかな？

早速やつちやおう、一番距離の近い奴に素早く近づき、殴り飛ばす。

あゝあ、また粉々になっちゃった。一発で死んじやうなんてつまらないなあ。

あ、一匹斬りかかってきた、でも遅いなあ、こんなんじや簡単に避けれちゃうよ。

振り下ろされる剣の腹を殴り、弾き飛ばす。弾き飛ばした剣が、他のモンスターに刺さって死んじやった。

つまらない、弱すぎて退屈しちゃうよ。もういいやさっさ殺して

お金を集めよう。

剣を無くして怯んでいる奴のお腹に力を抜いて蹴りを入れる。
他のモンスターも巻き込んで吹き飛び死んでいく。わかった、弱いんじゃないくて脆いんだ。

モンスターを殴り殺す。続いて近くにいた奴に回し蹴りをし、胴体と足を泣き別れさせる。

『ギヤアアアア！』残った一匹がかん高い声をあげる。

うるさい、耳障り、黙れ、そんな感想しか出てこない。すぐ殴り飛ばし鳴き声を止める。

終わった、やっぱり物足りないなあ。帰ったら隼人君を誘ってみようっと。

あれ？ あのおっきいのなんだろう？ さっきのと似てるけど、全然大きい。それに剣と一緒に盾も持つてる。

「オイ、オマエ」

「え？」

話しかけてきた。びっくり、話す知能なんて無いと思ったのに。

「オデノナカマヲ、コロシタノハオマエカ？」

「そうだけど？」

いきなり剣が振り下ろされた。失礼だなあ、話してる時に、モンスターに礼儀を求めちゃ駄目かもしれないけど。

難なく避けるが相手の怒りは収まっていないようだ。

「ヨクモコロシテクレタナ！ オマエモシネ！」

うるさいなあどうせすぐ死ぬくせに、さっきと同じ様に頭を狙い殴……ろうとしたが盾で止められた。

「ナンダ？ コノティドカ？」

「ふふふ、あはははははははは！」

面白い、面白いよ！ さっきと違う！ 私の拳を見切れてる！

いいよ、少しだけ本気をだしてあげる。

「ありがとう、少し面白かったよ」

「オマエナニイッテ……」

「光打 三瞬」

そう言った瞬間、モンスターの頭、胸、腹に穴が空く。

難しい事なんてして無い、ほぼ同時に殴っただけ。だけど隼人君は簡単に防いじゃうけどね。

じゃあお金回収しよ。最初に倒した、モンスターから一万円。

でっかいモンスターから……見たことないや、でも多分お金だよ
ね。

またでっかいの出るといいなあ。さっきよりも強い方がいいけど、
欲は言えないよね。

期待を膨らませながら歩き出す私なのでした。

金集め（後書き）

感想、助言お待ちしております。

戦闘狂の意外な対処法（前書き）

どうしてこうなった……

それではお楽しみ下さい。

戦闘狂の意外な対処法

ふう、そろそろか。太陽を見ると天辺より少し傾いていた。

おっと遅れるなこりや、急いで門の前まで走るが、やはり真樹と周はすでに集まっていた。

「遅いよー隼人君」

遅れた事で真樹はだいぶご立腹のようだ。しかしよかった、戦闘狂から戻ってこれないんじゃないかと心配したが大丈夫な様だ。

「すまん」

「自分で提案したのに、まったく！」

謝っても許してくれないらしい。うーんどうすれば許してくれるんだろうか。

「罰として私のお願いを聞いて貰います」

俺がどうすればいいか思案していると、真樹の方から罰を提案してきた。

隣で周が苦笑しているのが気になるが、向こうが罰さえ受ければ許すと言っているんだ、断る理由が無い。

「わかった」

「今わかったって言ったね？」

なぜか確認をとられる。不安があるが、今更断る事などできない。
「ああ」

「それでは罰を言い渡します」

少し緊張する、裁判で判決を下される犯罪者はこんな気分なのだろうか。

「私と十分間闘い続け『ダッ』周君！」

真樹達に背を向け走り出そうとするが、後ろから殺気を感じる。恐る恐る振り向くと、弓を構えた周が居た。

「周！ お前もか！」

味方だと思っていた周まで敵、俺の周りはすでに敵しかない。

しかしよく見ると周の額には冷や汗が浮かんでいた。

「ごめん隼人、歩けない様にするよって笑顔で言われたら……」

弓を持てない様になると脅さなかったのは、真樹なりの配慮だろうか。もしそうなら配慮という単語の意味を教えなければならぬ。「わかった、わかったから弓をおろせ」

弓を向けられて下手な事はできない。ただでさえ周の腕はピカイチなのだ。

本気をだされたら俺だって避けれるかどうか怪しい。体が懸かっているならなおさらだ。

「最初から大人しく従えばいいんだよ」

俺は捕虜か。

「じゃあ……やってくれるよね？」

真樹の今の目は獲物を見つけたライオンのそれだ。これで断れる奴が居たらここに連れて来い。本当かどうか試してやる。

「はあああ、わかったやつてやる」

長いため息をつきながら了承する。ここまで来たからには仕方ない、やってやるうじゃないか、というかまず断る選択肢がないし。

「やったあ！じゃあ早速やろう！」

「おう！」

さっきの化物退治で少し疲れているが問題無い。それにこの程度で疲れていたら、どのみち真樹の相手など出来やしない。

「じゃあ二人共、ついてきていい場所があるんだ」

用意周到な周に驚きながら、歩き出す周を追いかける。

真樹の方を見るとびっくりという顔をしていた。さすがにここまでする協力してくれるとは思って無かったのだろう。

「ここだよ」

歩き出して数分、着いた場所は障害物と呼ばれる物が何一つない所。

確かに決闘には持ってこいの場所だろう。足場にある草以外何もない。

「じゃあ二人共、位置について」

位置と言っても線が引いてある訳でも無いので、お互いに数歩下がるだけだ。「注意点が二つ、まず真樹ちゃん、隼人を骨折させない事を念頭に置いてね。」

「……極力努力します」

沈黙するのも仕方がない、真樹の戦闘狂は自分で抑えられる物では無い。

自分で抑えられるならあんな対処法を取らずに済むんだが……

「それと隼人、わかつてると思うけど、真樹ちゃんを斬らない様に気をつけてね」

「当たると思えんがわかった」

あの武術に攻撃当たる事などあるのだろうか。少なくとも俺は無い。

あ、師範代だったら当てるのも簡単か。この前真樹が『うう、師匠の拳が見切れ無い……』と愚痴ってたし。

「ん、二人共準備はいい？」

「ああ」

「おっけーだよ」

「それじゃあ、よい……始め!!」

開始と同時に、及川流古武術ご自慢の俊足で俺の懐に入ろうとする。だがやすやすとそれを許す俺では無い。

鎌を下から弧を描く様に切り上げる。当然真樹は避ける形になり、一度距離をとる。

果たしてトップスピードで方向転換できる人間が世界に何人いるだろうか。

「斬らないって言ったのに、危ないなあもつ」

「どうせ当たりゃあしねえだろうと」

真樹に向かって走り出し鎌を振りかぶる、その時の隙をつくのは武術家として当然だろう。「楽しい！　楽しいよ隼人君！」

「そっかい」

ため息交じりの俺の声など耳にも貸さず、飛び蹴りを繰り出してくる。

それを難なく避け、着地した隙を狙い鎌を振る。しかしそう簡単にはいくはずもなく、しゃがんで避けられてしまう。

逆立ちの要領でかかとを俺の顎に入れようとする。それを体を引く事で避け、数歩下がりが構え直す。

真樹がこちらを向き、にんまりと笑う。

「あははははははは！」「来たか……」

ここからが真樹の本性、こうなったらさっきの動きとはまるで別人になる。

『ヒュ』真樹の姿が見えなくなる。左右前後、確認するがいない。という事は

「上かッ！」

上を向いた時にはすでに真樹の拳が見えていた。直後『ドガッ』と音がし強烈な裏拳が俺の頬に直撃する。

地面を転がり、仰向けの状態で止まる。目の前にはすでに真樹が俺の顔に拳を振り下ろす光景があった。

チッ！ 心の中で舌打ちをしながら首を曲げ何とか避ける。それと同時に真樹を蹴り飛ばし距離を離す。

その間に構え直し戦闘狂を見据える。さすが古武術、純粹に殺す攻撃しかしてこない。

「あれえ？ おかしいなあ、何で死なないの？」

普通の人間なら殴られた時に死んでいる。自慢するつもりは毛頭ないが、殴られた方向に飛んで威力を半減させたただけだ。

というか殺す気だったのか。まあ理性がほぼ働いて無いので当然と言えば当然だが。

「じゃあ本気出しちゃうよ」

さて、ここからが本番だ。本性は出たが本気は出ていない。先ほどまではただ殴る攻撃しか来なかったが、これからは技が入る。

「光打 三瞬」

頭、胸、腹を狙い一瞬で放たれる三回の殴打。攻撃が早すぎて避ける事すら許されない。それを鎌の刃の側面で防ぐ。

『ガギン！』と耳障りな音がし、間髪入れず追撃を仕掛けてくる。

「光蹴 烈閃」

真樹の右足がブレる。次の瞬間鎌に何発も重い衝撃がのし掛かってきた。ぐっ！　だがもう終いだ。

蹴ってきた足を無理矢理掴み、引っ張る。

「キャ！」　軸足が左しか無いので簡単に引き寄せる事ができた。そしてそのまま

「ん……」

唇を奪う。仕方ないだろ！　これしか真樹の戦闘狂を鎮める方法がこれしか無いんだから！

「隼人君……」

その目は何だ！　そんな頬を赤らめて、上目遣いで見られても俺は

「ん……隼人くん」

唇を奪われた、ああ離れる！　真樹を乱暴に突き飛ばし町の方へ歩き出す。

「もう目え覚めただろ！　さっさと戻るぞ！」

「はい」「うい」

まったく、だから嫌だったんだ。必ずと言っていい程、この手を使わなきゃいけない。

おかげでこの前、俺と真樹を婚約させようと真樹の親父が動いて危うく本当に婚約させられる所だった。まったく、やってられるか！　宿に戻り機嫌を損ねた俺は、翌日の朝方まで真樹を無視し続けた。

戦闘狂の意外な対処法（後書き）

展開は僕も謎です。

感想、助言、お待ちしています。

次の町へ（前書き）

短っ！

それではどうぞ

次の町へ

「今日は次の町を目指そうと思う」

宿のチェックアウトを済ませた後、門の前でそんな提案を出す。そろそろこの町も出ていいだろう。ここにいた所で得られる物は無いし。

「次の町？」

周が疑問符を浮かべる。ああ、そういえばゲームの中かもしれない事、説明して無かったな。

「どうやって俺達がここに来たかわかるか？」

ここがどこかもわかって無いのにこういう質問をするのは少し意地悪だろうか。

「いや、まったく」

やはりというかほぼ予想通りの答えが返って来た。

「それはな、ゲームの電源を入れた事が原因だ」

周と俺の視線が真樹に向けられる。すると真樹は目を逸らし、ベタに口笛を吹き始めた。

どうやら薄々気付いていたらしい。

「あんな訳のわからない物を持ってきた時点で気付くべきだったんだ」

目を逸らす真樹にさらに追い討ちをかける。大体真樹の持つてくるゲームは今までもろくな物が無かった。

大抵は世に言うクソゲーや詰みゲー、さらにはやったら呪われると噂のゲーム。

全て俺の家でやると言って聞かない。ある時いい加減腹がたつてなぜ俺の家でやるのか問いただしたら、私の家には毎日ゲームは一時間の規則がある。と言った。

俺はそれを聞いた瞬間驚愕のあまり、しばらく開いた口がふさがらなかった記憶がある。

勿論その後真樹を何とかしてくれと、真樹の親父に頼んだのだが「近々結婚するんだ、それぐらい許容出来なくてどうする」と笑い飛ばされた。

その時無性に殴りたかったが、なにせ及川流古武術の道場主、当たるはずも無いのでぐつと我慢した。

真樹の親父さんよ、家では一時間が限度なのに人の家なら何時間でもやっていいんですか？

「つ、次の町早速行こうよ！」

話題を変えたいのか話を目的に戻す。

「ああ、そうだな」

ここでぐちぐち言っても仕方ない、これくらいで許してやるか。番兵に話をつけ門を開けて貰う。

眼前に広がるのは最早見馴れた景色。最初に見た時は美しい思ったが今は別段なんとも思わない。

近くに立ててある看板で距離と方角を確認するが。「読めない…

…」

書いてあるのは見たことも無い文字、いや違うな見たことはある。これは確か象形文字だったか。しかし文字の種類がわかった所で読める訳ではない。

「さてと、行きますか」

看板に書いてある文字を無視し歩き出す。読めないなら仕方ない、あんな物いくら眺めたってなにか解決する訳じゃないしな。

「え、これ無視していいの？」

周が看板を指さし尋ねるが、そんな事言われたって読めない物は読めない。

「北に一キロ後に西に二キロ」

「ん？」

後ろから声がする。振り返ると、そこには最初の時に会った美しい女性がいた。

「これはこれは、お久し振りです」

「お久し振りですね、隼人さん」

適当に挨拶をした後に軽く礼をする。礼儀作法については詳しく無いが、礼をされて不快になる人はいないだろう。

「所でいくつか質問があるのですがよろしいですか？」

この人に聞けば何かわかるかも知れない。最初に出会った時にも俺たちの名前を知っていたし、死んでも生き返らないというのは現実には当たり前だが、ゲームの中では生き返える事は当たり前に等しい。

目の前にいる女性は死んでも生き返らないと言った。そんな事を一般のキャラクターが知っているだろうか。まるで普通のゲームを知っているかの様な発言。

ここまで考えて俺の推測は確信に変わる、この人は何か知っているかもしれないではなく、この人は何か知っているに。

「まず一つ、ここはゲームの中でいいんですね？」

返事も待たず質問を開始する。この場合は質問ではなく確認だが。「よくお気づきなられましたね、その通りです」

女性は少し驚きの表情を見せ、俺が思った通りの返答をした。

「もう一つ、さっきの言葉は何ですか？」

振り返る前に言っていた不可思議な言葉、考えても理解できそうにないので言った本人に聞いてみる。

「看板の文字を訳しただけです」

「あ、そうだったんですか、わざわざありがとうございます」

「いえいえ」

どうやら親切心で訳してくれたらしい。さっきまで少し警戒していた自分が恥ずかしくなるほど邪気の無い笑顔が俺に向けられる。

「最後に一つ、このゲームにレベルはありますか？」

実は一番気になってたりする。俺だって男だ、ゲームみたいに重力を無視した技に憧れない訳じゃない。

「このゲームにレベルという概念は存在しません。全て当人の実力次第です」

どうやら俺の憧れは夢に終わったようだ。ガツクリと肩を落とし落ち込む俺に不思議そうな目が向けられるが地味にシヨックを受けているので、すぐに立ち直れない。

ちくしょう、結構期待してたのに裏切られたっ！ ゲームなら普通あるだろう！ ああ、夢は夢のまま終わる運命なんだな。

「ありがとうございます……」

「いえ、それでは私はこれで」

語気がなくなっている俺を不思議そうな目を向けながら一瞬で姿を消す。

はあ、無い物ねだりしても仕方ない、ここは現実には甘くないと割りきって諦めよう。現実じゃないけど。「じゃあ次の町を目指そうか」

喋る機会がなかった周が次の町へと急かす。少し時間をくってしまった。女の人の話では北に一キロの後西に二キロらしいから、三十分もあれば着くだろう。「よし、じゃあ行きますか」

残念な気持ちを持ちながら目的地を目指してあるきだすのだった。

次の町へ（後書き）

次回は頑張ります。それで勘弁してください。

感想、助言、お待ちしています。

ミロイ（前書き）

.....それではどうぞ

ミロイ

「お、あそこか」

歩き始めて四十分かそこら、村が見えてきた。思ってたより時間がかかったな。

村に入り、あたりを見渡す。人口が少ならしく家が二十軒程しか無い。村の中央に作られた大きい畑、そして少し先にある店……文字は読めないが、変わった店だということはわかる。

奇妙としか言い様の無い看板。狐の顔に白と緑と紫のストライプが入れており、それを挟む様に同じ顔の狐が笑っている。

なんだあれは、ふざけてるとしか思えない。周もうわあって顔してるぞ。

「行こう！ あの店行こう！」

それに興味を持ったのか、真樹は俺たちの手を引っ張り、奇妙な看板の店に入る。

「いらっしやいませえ」

ん？ 声は聞こえるが店内を見渡すが誰もいない、空耳か？ やばいなこの歳で。

「下ですよお、下あ」

舌足らずな声で言われた通り下を見ると、真樹に勝るとも劣らない、小さな美少女が頬を膨らましこちらを見ていた。

「あはは、ごめんな。え」と

「ミロイですう」

「ごめんな、ミロイちゃん」

謝りながら頭を撫でる。すると嬉しそうに笑ってくれた。その笑顔は天使の様に無垢で無邪気だ。ああ、癒される。

「……か」

真樹がふと呟いた、か？ 一体何の事だ？

「可愛い！！！」

俺を押し退け、ミロイちゃんに飛びつき頬擦りする真樹。ミロイちゃんは驚いた顔をしている。

って当たり前か、いきなり飛びつかれて、挙げ句頬擦りされる何て事、中々ないだろう。とりあえず真樹を引き剥がさなきゃな。そう思い真樹にゆっくり近づくが

「真樹ちゃん！ ミロイちゃんが困ってるだろ！」

周が珍しく怒鳴った。周が怒鳴った所なんて、少なくとも俺は今まで見たことが無い。怒鳴られた真樹は、鳩が豆鉄砲を食った様な顔をしている。

「ご、ごめんなさい。ごめんね、ミロイちゃん」

混乱から復活し、ミロイちゃんから離れ頭を下げる真樹。

「大丈夫です」

それを満面の笑みで許してくれる。周はうんうんと頷き、何やら満足そうな顔をしていた。お前は一体何がしたいんだ。

「ミロイちゃん、この店は何が置いてあるの？」

周がそんな質問し、ミロイちゃんの目が光ったのを俺は見逃さなかった。

「はい！ ここは通称何でも屋、武器から防具、冒険には必需品の傷薬、さらには主婦の相棒フライパンまで完備しています」

「へ、へえ」

いきなり仕事モードに入ったミロイちゃんに、少しばかり引いてしまった。だがそれだけ仕事熱心という事なのだろう。

「それじゃあ武器を見て貰えるかな？」

今のままで問題無いとは思うが、一応見といっても損は無いだろう。

「それではこっちです。ついてきて下さい」

とととと可愛らしい擬音が聞こえてきそうな音で店の奥に走って行く。ああ、癒される。

案内された場所は店のかなり奥。立て掛けてある物は鎌、弓、手甲、まるで狙ったかの様な品揃えだった。真樹の武器は少し違うが。「これ全部ミロイちゃんが作ったの！？」

テンションが上がっているのか、真樹がそんな現実的では無い質問をする。子ども一人でこんな物作れる訳がない。

「はい！ 品質には自信があります！」

何だつて！？ 子ども一人でここまで作れる物なのか？ 鎌を手に取り切れ味を指で確かめる。すると触れた瞬間、指から赤い液体が滴り落ちた。切れ味も申し分無い、熟練の鍛冶屋でも一年に一度作れるか作れないの業物だ。

「凄いぞこれ！」 俺が声を張り上げて言う。真樹と周も各々が得意としている武器を取り、性能を計る。すると感激と驚嘆が混じった表情をした。

「この弓凄い！ 何の素材かわからないけど初めて引いても硬くならない様になってる！」

「こつちの手甲も凄いよ！ 軽いし凄く丈夫、何より私が殴っても壊れないし！」

三人共同じ様にテンションを上がり賞賛の声を上げている。弓と手甲はよく知らんが、どうやらかなりの物らしい。作った本人は「えへへ」と言つて喜んでいる。

「「「買った！」「」」

三人同時に叫ぶ、するとミロイちゃんは「ありがとうございます」「」と言つてレジの方へ走つていった。

いやゝそれにしてもいい買い物だったなあ。こんな所であんな業物に出会える何て、夢にも思わなかった。するとミロイちゃんが会計を済ませ、金額を読み上げる。

「合計五万三千リルになりますう」

リル？ ああ、そう言えばこの世界の金の名称だったな。

「ちよつと待ってくれ」

俺は上機嫌で財布を取りだし中身を確認する。俺はそこで絶望した。圧倒的に金額が足りないっ！ 財布の中身は一万リルしか無い、どうする？ 考えろ、こんな業物二度と手に入らないかもしれない。「俺ちよつと外出てくる」 考え出した策は化物を殺して稼いでく

る事、パツと行つてサツと歸つてこよう。

「これで足りるかな？」

俺が走りだそうとした時に真樹がポケットから見たこと無い硬貨を取り出した。

「あと三千リルですう」

ナイスだ真樹！ 俺は財布から三千リルを取りだしミロイちゃんに渡す。

「ありがとうございますあ」

お辞儀をしてお金をレジに持つていく。それにしても何で真樹は五万も持つてたんだ？

俺の疑問に気づいたのか、真樹は「ふふん」と得意げに鼻を鳴らし説明を始める。

「実はでつかいモンスター倒してたんだよね」

「へえ、だからあんなに持つてたんだ」

自慢気に話す真樹に素直に感心する周。俺の方に来なくて良かった、面倒臭くなくていい。

「それではどうぞお」

レジから戻つて来たミロイちゃんが武器を渡してくれる。

「ありがとう」

鎌を手にし、眺める。やっぱりすげえな、改めてそう思う。真樹も周も手に入れて喜んでいる。

真樹と周が試したいと言っているが、しばらく戻つてこれない気がするので却下しようとするが。

「ここは公平に多数決で決めよう」

周が多数決を提案するが、多数決というのは名目だけで実際は数の暴力だ。

「それじゃあ武器を試したいひと」

真樹がおもいきり手を上げる。はあ仕方ない、しばらく戻れなさそうだが、外に出てやろうじゃないか。

俺は外に出る準備を始めようとするが、手を上げるのは真樹しか

いない。

「あ、あれ？ 周君？」

当然困惑する真樹。味方だと思っていた人が上げないんだ。無理もない。だが問題なのは周だ、何で手を上げ無かったんだ？ すると周は申し訳なさそうに口を開いた。

「ごめん真樹ちゃん。今見たら弓矢がもう無かったんだ」

そういう事か、確かに弓矢という物無しに機能する武器ではない。

「ミロイちゃん！ 弓矢は置いてないの！？」

鬼気迫るいきおいでミロイちゃんに迫る真樹。ミロイちゃんは泣きそうな顔になっている。

「すいません、今は置いて無いんです」

泣きそうな声で謝る。小動物みたいで可愛いと思ったのは秘密だ。

「そんなぁ……」

がつくりと膝をついて倒れ込む真樹。良かった、どうやら外に出る事は無くなったようだ。

「明日の朝でいいんでしたら作ります」

「ほんと！」

ミロイちゃんの言葉にいきおい良く顔を上げる真樹。どうやら明日は確実に外に出る事になりそうだ。

それから俺達は店の商品を見ているうちに夜になっていた。

「じゃあそろそろ宿屋に行くか」

「はい」「うい」

夜になった事だし、明日に備えて早く寝なければならぬ。使うのは新しい武器だし、朝から素振りでもして多少の感覚も掴まないと。

「もう、行っちゃうんですかぁ？」

ミロイちゃんが悲しそうな表情を見せる。

「そんな顔しないで、ミロイちゃん。明日また会えるんだから」

頭を撫で優しく微笑む真樹。その光景はさながら姉妹のようだった。

「……はい！ それではまたあしたあ」
「うん！」

とびっきりの笑顔で送り出してくれるミロイちゃん。それに俺達も笑顔で応え店を出る。

宿屋に行き、部屋に入る。明日は大変な一日になりそうだ。そんな予感をしながらベットに入り目を閉じた。

しかし俺の予感など嘲笑うかの様な事件が起こる事など、今の俺には知る由も無い。

ミロイ（後書き）

いや、今回は短くせざるをえなかったんです。

次回こそ、次回こそ！ 頑張ります！ だからどうか見捨て無いでください。

周の過去 1 異変

『ヒュン』村を少し離れた所で風を切る音がする。

空がうつすら白んでいる時間から鎌の素振りを続けて、今は完全に日が昇っている。

そろそろ戻るか、鎌を肩に掛けながら村に戻る。すると真樹と周に丁度鉢合わせになった。

「あれ？ 隼人、何してんのこんな朝早く」

「ちよつと素振りをな」

鎌は扱いが地味に難しい。傍目から見たら簡単そうに見えるが、実際やってみたら予想の斜め上に行くこと間違いなした。

「それよりお前達は？」

「ミロイちゃんに会いにくんだよ」

そう言えば昨日、明日の朝ならって言ってたな。暇だし俺もついでか。

「隼人君も来る？」

ついて行つていいか聞く前に誘いが来た。願ったり叶ったりとはまさにこの事だろう。

「ああ」

「ん、じゃあいこうか」

早速ミロイちゃんの店に向かい、扉を叩く。

「ミロイちゃん」

「はいはい」

可愛らしい声と共に扉が開く。まだ眠たそうに目を擦りながらこちらの顔を見る。すると顔を見るなり満面の笑顔になった。

「おはようございます」

お辞儀をして中に入って下さいと言わんばかりに手招きをする。

「弓矢できてるかな？」

店に入り早速完成したか尋ねる周。やはり内心新しい武器を試し

たくて、うずうずしてるんだろう。

「できてますう」

ミロイちゃんはカウンターに向かい、下から弓矢を取り出す。本
当に一晩で仕上げたんだな。

「どうぞお」

ミロイちゃんは弓矢を手渡し、あくびをした。やっぱり一晩中作
業してたから、子供では起きてるのが辛い時間帯まで起きてたのだ
ろう。少し悪い事させちゃったな。

「ありがとう。夜遅くまでこれを作ってたんでしょ？ ごめんね」

そう言って、周はミロイちゃんを優しく抱きしめる。と思つたら、
すぐに離して首をブンブン振った。変な奴だな。

「弓矢もできた事だし、早速行こっか」

恐らく一番外に出たいと思っっているであろう、真樹が予想通りの
発言をする。

「ああ、そうだな」

ここで「まだいいんじゃないか？」なんて言っても、無駄だとい
う事は知っている。

「じゃあね、ミロイちゃん」

周はミロイちゃんの頭を撫で、店を後にする。何だ？ 表情が暗
いな。 何かあったのか？

「周君、大丈夫？ 元気無さそうだよ？」

真樹も周の異変に気づいたのか、俺と同じ疑問を問いかける。

「いや、何でもないよ」

疑問など鼻で笑うかの様に、首を横に振り否定する周。しかし表
情の暗さが変わる事は無い。本人が話したく無いのに、無理に聞き
出す事は出来ないな。

「ねえねえ、隼人君」

「ん？」

村の出口まで向かう途中、真樹に肩を叩かれた。

「何だ？」

「実はね、周君朝からおかしかったの。起きた時はベットから勢い良く起きて、冷や汗をかいてたんだよ」 悪夢でも見たのだろうか。それを聞き出そうとするのは、無駄に終わるだろう。また「何でもない」と言って、はぐらかされるだけだ。

「今日はどうする？」

村の出口まで着き、どう行動するか尋ねられる。まあ、別れるか一緒に行動するか二択しか無いが。

「今日は三人一緒に行動する」 別れてもいいが、周の調子が心配だ。本人が言うには何でもないらしいが、目に見えて顔の表情がおかしい。そんな状態で一人にしたら、どうなってもおかしく無い。「どうして？ 別れた方が効率いいんじゃないの？」 当然とも思える疑問が、周に浮かび上がる。本人は何でもないと言い張っているが、それも多分虚勢だろう。

「この敵と初めて戦うんだ。強さがわからない限り、ばらばらになる事は出来ない」

もっともらしい理由をつけて、無理矢理納得させようとする。周の事だからこれで納得すると思うんだが。

「……わかった」

少し沈黙したが、無事に納得してくれた様だ。

「じゃあ、行こっか」

真樹が歩き出し、俺達はそれを追いかける。何も起きなければいいが……

「いたよ」

歩き始めて十分、真樹が指をさす方向を見ると、二十メートル程先に腕が四本あるゴリラの化物が五匹いた。

「周、頼めるか？」

「うん」

弓を構え、引き絞る。次の瞬間『パシュ』と音が聞こえ、化物の頭に当たる……かに思えたが、弓矢は化物の頭のすぐ横を通り過ぎた。こちらに気づいたらしい化物は、ゴリラらしく胸叩き始めた。

やはり今日の周はおかしいな、いつもならこんなミスしないんだが。周の方を見ると、苦虫を噛み潰したかの様な顔をしていた。

「気にするな、たまにはミスもある」

適当に励まし、来るべき敵に備え構える。四足歩行で迫る化物。まず俺に向かつてくる化物の脳天に鎌を突き刺し、蹴り飛ばしながら引き抜く。

二匹目、捕まえようと伸ばしてくる腕を横に避け、横に薙ぎ腹を分断する。そしてそのまま回転し、鎌を投げる。鎌は奥にいた化物の首を切断する。

「終わったよ」

真樹が化物を足蹴にしながら終わりを告げる。やはり腕と足は血まみれだった。

それから三時間、俺達は化物を殺し続けた。しかし、周の調子は戻る事は無かった。

「いっぱい手に入れたねえ」

村に帰る途中、真樹が財布を手にながら、満足そうな表情でそう言った。

「そうだな」

周はというと、行きよりさらに表情が暗くなっていた。戦闘で役に立てなかった事が、さらに拍車をかけてるのだろう。

「早速ミロイちゃんに会いに行こ……」

『ドサッ』硬貨が大量に入り、重くなった財布が重量感のある音を出し、落ちる。落としたのも無理はない。何故なら俺達の眼前に広がっている景色は……村の家々が黒い煙を出しながら、燃え上がっている光景だった。

周の過去 1 異変（後書き）

シリーズ分けてるだけなんですよ！

周の過去 2 絶望

「何……これ」

目の前に広がっている絶望的な景色、一体なにが起きたんだ？
疑問と混乱しか浮かばない自分に喝を入れ、思考を復活させる。

「ミロイちゃん!!」

周が村に向かって走り出す。ちっ！ まったく、今日のあいつはどうしたんだ！？ とはいえミロイちゃんの安否が気になるのも事実、急いで周のあとを追いかける。

「……くっ」

村に入った時に浮かんだ感想は、まさに凄惨の一言だった。村の中央にあった巨大な畑は踏み荒らされ、作物は全て食べる状態では無かった。家はほぼ燃え上がり、今まさに崩れ去ろうとしている。村の所々には斬り捨てられた村人の死体が転がっていた。

そしてミロイちゃんの店は例に漏れず、燃え上がっている。周は燃え上がっているにも関わらず、無謀にも扉を蹴破り、入っていた。

「あのバカ！ いくぞ、真樹！」

目の前の光景にショックを受け、呆然としている真樹の手を掴み、ミロイちゃんの店に向かう。

店に入る。すると暑苦しい空気と煙が俺達を襲う。畜生！ 二人はどこだ！

「周！ ミロイちゃん！」

名前を呼び叫ぶが返事は返ってこない。こうなったら仕方がない。「真樹、外で待ってる」

俺が探しに行くしかない。周の身体能力は俺と真樹みたいに優れてはいない。それは本人が一番わかっている筈なのに。くそっ！
「待って、私が行くよ」

腕を掴まれ、強制的に制止させられた。

「もう、大丈夫なのか？」

「うん、もう平気。だから隼人君は、生存者がいるかどうかを探してきて」

確かに現状で最高の手だろう。火事現場の救出はスピードが命だ。俺達の中で一番速いのは真樹、これ以上無い適任と言えるだろう。

「わかった、それじゃあ周とミロイちゃんは任せたぞ」

「うん」

俺は店を出て、村の生存者を探し始めた。

周視点

「ミロイちゃん！」

何度この言葉を叫んだだろう。しかし叫んでも周りの火の音に掻き消されて、実際はほとんど声の音は聞こえていないだろう。

「ミロイちゃん！」

カウンターの奥に行き、見渡す。しかし煙によって視界は阻まれ、何も見えないに等しい状態だ。

どこ！？ どこなんだよ！？ また、またあの日の様に失うのか、

僕は……

いや、失わせはしない。僕の目の前では誰も死なせない、そう誓った。だから助けて見せる、何をしても絶対に。

そう誓ったはずなのに、その意思をへし折ろうとするかの様に、もう一人の僕が語りかけてくる。

助けてお前は何か変わるのか？ 何も変わらないだろう。強いて言えばお前が自己満足に浸れるだけだ。

違う。

違う。お前はミロイちゃんを助けたいんじゃない。あの子に似た人を助けただけだ。

違う。

何が違う？ あの日の過ちを忘れたいだけだろう？ 似た人を助けたという形で。忘れれば楽になるだろう。ただお前の罪が軽くなる訳じゃない。

忘れようなんて思っただけ！ 僕はただ単純にミロイちゃんを助けたいだけで！

嘘をつくな。あの子を助けられなかった事から、逃げたいだけだろう。似た人を助けて、それで忘れようとしているだけだ。

違う！ 僕は……僕は……

隼人や真樹と一緒に過ごした日々は楽しかっただろう。お前が過去をひた隠しにして過ごした日々、『もし知られたら』そんな不安を抱えながら過ごした日々。

もう……やめてくれ……

何をだ？ お前を責めるのか？ また逃げるのか？ また過去に怯えながら過ごすのか？

「うわああああ……！」

泣き出してしまった。僕はまた逃げたんだ。何も考えない様に泣いていれば誰かが慰めてくれる。そんな偽善に僕は逃げたんだ。結局は誰でも良かったんだ。隼人じゃなくても、真樹ちゃんじゃなくとも。

僕の傍にいてくれる。そんな人がいれば良かったんだ。過去を隠して、過去に囚われ、過去に苦しみ、過去に泣き出す。

なんて無様な姿だろう。自分が自分で嫌になる、殺したい程に。でもそれもすぐに叶うよ、だって目の前に倒れてきた木が

「なにやってんの！？ 周君！？」

倒れてきた木が殴り飛ばされた。誰？ せつかく死ねると思ったのに。

「ぼーっとしてないで、さっさと脱出するよ」

僕の手を掴み、出口に向かおうとする。やめてよ、僕はここで死ぬんだ。掴んだ手を振り払う。

「周……君？」

「僕の事はほつといて、ミロイちゃんを捜して、僕はもういいから」過去の事に囚われているだけかもしれない。だけどミロイちゃんに助かって欲しいと思う。いいんだ、僕はもうどうでも。

『パンツ』僕の頬から爽快な音がした。それになんだか熱い。ああ、頬を叩かれたのか。

「いい加減にしてよ！ 誰一人死ぬなんて事あっちゃいけない！ハッピーエンドしか許さないんだから！」

はは、もう無理だよ。僕は赦される事の無い罪をおかした。死んで償うしかないんだ。生きるなんてつらいだけだよ。

「先に外に出てて、周君」

僕の襟首を掴み、出口に向かって投げられた。すると見事に出口を通り抜け、暑苦しい空気が抜け出した。しかし受け身も取れない僕は背中から落ち、意識を失った。

真樹視点

まったく、帰ったら周君には説教だよ。説教。それよりミロイちゃんを探さなきゃ。

私は気配で探る。目何か見えなくなつてどうにかなるもん。あ、いた！

「ミロイちゃん！？」

気配の方に駆け寄り、安否を確認する。良かった、まだ息はしてる見たい。

ミロイちゃんを抱き抱え急いで出口に向かう。私の足なら二秒もかからない。

無事店を出る。直後店が音を立てて崩れ去った。危ない危ない、もうすぐで私達もぺしゃんこだったよ。

「大丈夫か、真樹？」

店が崩れる音を聞いて駆けつけてくれた隼人君。

「私達は大丈夫だよ、それより村の皆は？」

「残念だが……」

生存者はいなかったらしい。そっか……凄く、悲しいな。

「……ん……」

ミロイちゃんが目を覚ました。良かった、あのまま目を覚まさなかつたら、どうしようかと思った。

「大丈夫？ ミロイちゃん？」

「はい。大丈夫です」

笑顔になったミロイちゃん。大した怪我は無さそうだね、うん。

「ミロイちゃん、誰がこんな事をしたの？」

ずっと気になってた事を聞く。こんな事をして、絶対に許さない！

「はい。それはあ……」

周の過去 2 絶望（後書き）

ダアアアク！

ちゃんと書けてるか、不安です。
そして懲りずに切り換え視点でご免なさい。

周の過去 3 色（前書き）

本つつつ当にご免なさい！ 遅れてすみませんでした。
それではどうぞ。

週の過去 3 色

ミロイちゃんが目を覚ました。怪我は……右腕に火傷があるな。だが、大きな物じゃないから心配する必要は無いだろう。

「ミロイちゃん、誰がこんな事したの？」

真樹がミロイちゃんに尋ねる。確かに俺も気になっていた所だが、大体予想はついている。

「はい、それはあ……」

ミロイちゃんが少し口ごもる。村が襲われた時の事を思い出してのだろう。その表情は苦痛に歪んでいる。俺達が村に居れば守れたかもしれないのに、金集めなんかしてる場合じゃなかった。だが過ぎた事をいつまでも後悔しても仕方がない。今は犯人を特定するのが先決だ。心苦しいが、ミロイちゃんには襲われた時の事を思い出して貰う他ない。

「……盗賊です」

俯き、震えた声で答える。やっぱりか……ゲームの中だから、それくらいが妥当だと思っていたが……

子供には辛い光景だっただろう。普通だったら盗賊が村人を斬っているのを見た時点で、泣き叫んでもおかしく無いのに。それを我慢して店のどこかに隠れた。怖かっただろう。盗賊共が自分の店を蹂躪していく音を聞きながら、息を潜めている時間は。いつ見つかるかわからない、そんな恐怖に耐えながら過ごした時間は。

「ありがとう、ミロイちゃん。ごめんね、辛い事思い出させちゃって」

真樹が優しく抱きしめる。それをミロイちゃんは「大丈夫です」と笑顔でそう返した。しかし同時に一滴、眼から雫が流れ、ミロイちゃんの頬を濡らす。

「ミロイちゃんは強い子だね。でもね、泣きたい時は泣いていいんだよ」

真樹が優しく語りかけ、一層強く抱きしめる。

「……うう……ひつく……」

その言葉にミロイちゃんの心は容易く決壊し、本人の意思とは別に泣き出してしまふ。少なくとも、今のこの子じゃあ現状を全て受け止めるなんてできない。まだミロイちゃんは子供だ。『大丈夫』と言って強がる必要なんてどこにもない。

「……ひつく……怖かった……怖かった……みんなとおんなじ様に死んじゃうんじゃないかって……うう……ひつく……うええん！」

「もう大丈夫だよ。これからはお姉ちゃんがずっと側に居るからね。よしよし、とでも言うようにミロイちゃんの背中を一定のリズムで叩く。その姿は姉妹では無く、今度は母親と娘かのように見えた。

「……ほんとに？」

一度顔を離し、真樹の眼を見ながら涙声で聞くミロイちゃん。

「本当だよ」

優しく微笑みながら答える。そしてもう一度抱きしめる真樹。

「お兄ちゃん達も？」

おっと、ずっと傍観していた俺に質問がくるとは思わなかった。

だが答えなど一つしかない。

「もちろん、もう一人の兄ちゃんは寝てるが、同じ答えを言うよ」

少し横で寝ている周に一瞬目線を送り、すぐミロイちゃんに俺の中で最高の笑顔を向ける。

「……お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありが……とう」

そこで緊張していたの糸が途切れたミロイちゃん。『すーすー』

と寝息をたてて寝てしまった。しかしその顔は安心の表情で満ちていた。

「さて、おい、起きろ周」

体を揺すり起こそうとする。ん？　そういえば何でこんな所で寝

てんだ？　んゝまあいいか。

直後「……んん」と言つて眼を微かに開ける周。俺は開いた眼を見た瞬間、驚愕した。周の眼が一切の色を失っていたのだ。

人の眼には色がある。喜色、悲色、怒色、焦色、他にも様々な色が人の眼にはある。だが周の眼はそれら全てを失っていた。俺は知っている。何故この様な眼になるか、それは自分に絶望した時。二ユースで、昨日自殺者を見た、と言った自殺者の知人達はよくこう言う『信じられない』と。あれはまだ光があった、希望があった。なのに自分で命を絶つという愚かしい行動にでた。自殺者の眼には、まだ色がある。世間への怒りの色、憎しみの色、嘆きの色。そんな人達すらある様な眼の色が今の周には無い。

「周……なにがあった？」

俺は単刀直入に聞く事にした。わざわざ遠回りにきく事はできない。少なくとも今のこいつには、な。

「……特になにもないよ」

俺の顔を見ながら答える周。そのせいで色の無い、いや、死んでいる周の眼がはつきりと見える。ふざけやがって、なにも無いのにそんな眼をする奴がどこにいる。

「もう一度だけ聞く、何があった？」

少し威圧的に聞く。すると周は立ち上がり、苦笑まじりに「なにもないよ」と言った。

「……そうか、ならいい」

それ以上聞くのをやめた。本人が言いたくない事を追究しても、徒労に終わるだけ。何より恐れたんだ。いつも明るい周が何故こんな状態になる、それだけで出来事の闇が濃いのをわかってしまう。その闇に触れる事は俺には出来なかった。

「じゃあ、行こっか」

真樹が立ち上がり、そのまま準備運動を始めた。行くとどこに行くつもりだ？

「どこ行くの？」

俺と同じ疑問を持った周が質問する。

「もちろん、盗賊の所に」

そう言った真樹の表情は笑っているが、眼の奥に怒りの炎が見て

とれる。村をこんな事にされて、俺も怒りを感じなくも無いが……
「その盗賊の居場所はわかるのか？」

溜め息まじりの俺の言葉に「……あ」という顔をした。はあ、大
体予想はしていたが、まったくこいつは……

前もあつた展開に再度溜め息を漏らしながら、俺は曇天の空を見
上げた。

周の過去 4 戒（前書き）

は、あ、相変わらず短いなあ。

週の過去 4 戒

盗賊の居場所、それを突き止める手段を考えると、ふと思いついた。足跡が残ってないかと。幸いこの世界はアスファルトなどで舗装されていないから足、跡が残っている可能性は充分にある。俺は村の出て土の道を見る。

「どうしたの？」

俺が歩き出すのを見て、後ろからついてきたらしい真樹が疑問を浮かべる。よし、思った通りだ。

「見る」

俺は道を顎で指す。そこには足跡が大量についた道があった。

「これは……盗賊の足跡？」

珍しく物分かりの良い真樹に少し驚きながら、『その通り』と言うかの様に頷く。

「これを辿って行けば盗賊のアジトがわかるはずだ」

にやり、と自分でもわかる意地の悪い笑みを浮かべる。行ってみるか。そう思い周に事情を説明しに一度村へ戻る。

「周、盗賊達の足跡を見つけた」

「そうなんだ、じゃあ早速行こう」

弓の入った袋を担ぎ、歩き出そうとするが、俺は周の肩を掴みそれを制止する。すると周は怪訝な顔をして俺を見る。

「……なに？」

不愉快極まりないという声で睨んでくる。そして掴んでいる手を一瞥して振り払い、再度睨む。

「お前はここに残れ」

「何で？」

俺の言葉に疑問を持つ周。当然だろう。いくらミロイちゃんが居るとはいえ、一人だけ除け者にされるのとはほぼ同義だ。だが俺にも残ってもらうだけの理由がある。

「今日のお前は正直役に立たない。そんな奴を連れて行っても戦闘で混乱を招くだけだ」

「っ！」

動揺を隠せずに思わずうろたえる。そして本当の事を言われ悔しそうな表情をし、それと同時に地面を蹴る。

「それにミロイちゃんはどうする？　ここで俺達が全員出ていったら、一人になるんだぞ」

あんな事があつたんだ。目が覚めた時に一人だったら、不安も相当な物になるだろうと容易に想像できる。それに傍にいないと言った後だ。これで一人にしたら申し訳がたたない。周の知らない事情に苦笑しながらふと真樹の方を見ると、手をワキワキさせて寝ているミロイちゃんに迫っていた。うん、何も見なかった事にしよう。

「真樹ちゃん」

そんな真樹の頭に手刀を入れ、溜め息混じりに「わかったよ」と言った。無事納得してくれた様だ。よし、じゃあぱと終わらせてさっさと帰ってくるかあゝ

「行くぞ、真樹」

まだ痛そうに頭をさすりながら涙目で「はい」と答える。か、可愛いなんて思っただけからな！

俺は鎌を担ぎ、村を出る。直後、真樹が追いついて並行する形になる。俺の顔を覗きこんだ真樹が不思議そうな表情をした。

「隼人君大丈夫？　顔赤いよ？」

「なな、何でもない」

そう言っただけで歩調を早めた俺に、再度疑問符を浮かべながら付いてくる。

そんなに赤くなってたか……気を付けないと。

周視点

はあ、行っちゃった。『今のお前は役に立たない』か……隼人に言われた言葉を反芻しながら苦笑を漏らす。ちよつとシヨックだった。今日の僕は役に立たない。そんな事僕が一番よくわかってる。調子が悪くなった原因、とはまた違うけど、影響を与えている子がすぐ隣で寝ている。なんて安心しきっている顔だろう。まるで聖母にでも抱かれていたみたいだ。

「……ううん……お兄ちゃん……」

いきなりの寝言に少し驚きながら、僕は微笑む。それと同時に心は痛み、不意にあの子を思い出すの。

「しゅーう、なぐにしてんの？」

後ろからあの子の声が聞こえた気がした。勿論そんなはずは無いとわかってはいる。しかし、僕の体は頭の考えとは裏腹に勢いよく振り返った。案の定振り返った先には誰もいなかった。いないのは当たり前前、わかってはいる。わかってるけど……！

僕の体は勝手に地面を殴り、自分を戒めるかの様に、力を込めて何度も地面を殴る。

この行為をするのは五度目。あの日の夢を見た日には決まって、体が勝手に地面を殴り続ける。

「……ううん」

ミロイちゃんが眉をしかめ、うつすらと目を開ける。それを見た僕は少ない理性で殴るのをやめる。

「お、おはよう」

笑顔でミロイちゃんに挨拶をするけど……どうやら引きつってたみたいだ。不思議そうな顔をしてる。

「どうしたんですかあ？」

不思議そうな顔から一変、心配そうな顔になった。天真爛漫な子だな、ますますあの子にそっくりだ。

「何でもないよ」

隼人達にも言った誤魔化しの言葉を、ミロイちゃんにも言う。す

るといきなり怒りの表情になった。

「何でもなくないですう。何があつたんですかあ？」

流石は子供言うべきか、純粋な瞳の前に僕の嘘は容易く見抜かれた。駄目だよ。そんな瞳で僕を見ないでくれ。

「……昔の事をね、ちよつと思ひ出したんだ」

ミロイちゃんの純粋に耐えられず、原因を話してしまう。

「話してみて下さいい。少しでも楽にしたいんですう」

ミロイちゃんが真つ直ぐ僕の眼を見る。やめろ、やめてくれ。そんな眼で僕を見ないでくれ。

「六年前」

僕の口は勝手語りだした。

周の過去 5 過去？ 裕璃（前書き）

お久しぶりです。
ただ一言、見捨てないで！！

周の過去 5 過去？ 裕璃

「六年前、僕は大切な物を一つ失くしたんだ」

過去編

「腕が！ 腕があ！」

そう言いながら僕は練習場の床に倒れ込んだ。はあ、やっと終わった。父さんから受けた新しいノルマきつい！ 昼頃言われたけどもう日も沈みかけてる時間になった。子供に五十メートルの的を二百回とかきつすぎる。

「やっと終わったか、周」

僕にとてつもなくきついノルマを与えた父さんが溜め息まじりにそういった。

やっとして酷いな。時間かかるノルマ与えたの父さんじゃないか。心の中で毒づきながら、うまく言うことを聞かない足に喝を入れ立つ。ああ、もうご飯食べてさっさと寝たい。

「ああそれと、夕飯の材料を母さんが買い忘れてな。材料が無いらしいんだ。という訳で周、材料買ってこい」

……え？ 今なんて言った？ 腕が上がらない僕に向かって、買い物をしてこいだって？ 父さん本気で言ってる？ いや、今まで父さんが冗談を言った事なんて一度もないけど。

「ほら、これを買ってくる材料を書いた紙と金だ。さっさと行ってこい」

紙とお札を無理矢理握らせ、踵を返して家に戻って行く父さん。その後ろ姿にありったけの憎しみを込めて睨み付けようとしたら、いきなり振り返ってこう言われた。

「お前は喧嘩を売っているのか？」

「滅相も御座いません」

正座をして地面に手をつけ頭を下げるといふ、日本古来からある土下座をすぐさま実行する。この動作も大分体に染み付いてきた。まったく望んでなかったけど。

「ならさつさで行ってこい」

「わかったよ」

はあ、と見せつける様に溜め息をついて、弓具をしまい始める。気が重い……腕も重い。文句を言いながらもしまい終わり、自分の部屋に戻って、汗で濡れた気持ち悪い服を着替える。財布よし、ケータイよし、材料の紙よし、準備完了。玄関に行き、靴を履いて扉を開ける。

「寄り道するんじゃないぞ」

いつの間にかいた父さんに少し驚きながら「わかってるよ」と苦笑まじりに返事をして家を出る。

家を出て五分かそこら。一度納得したはずだけど、やはり不平不満が出てくる。まずめんどくさい。疲れてる体にこれはきついし、買い物なんて滅多にしない事だから、体に疲労が普段より溜まる。「しゅーっ、な〜にしてん、の!」

「のうえ!？」

ピークに到達する寸前の愚痴中、急に背中にのし掛かる重圧。ノルマでの疲労と普段しない買い物ストレスで疲れた僕の体は耐えきれず前に倒れてしまった。

「んん? どうしたのかな? いつもならこれくらいどうって事ないのに」

のし掛かったはずの張本人は、いつのまにか倒れた僕の顔を覗き

こんでいた。「やめてよ、裕璃ちゃん」

ショートの髪型をした美人。そして昔からの友達に溜め息をつきながら立ち上が……ろうとしたが、思ったより疲労が溜まってたらしく、しりもちをついてしまった。

「んん？ 何だか元気ないみたいだね？」

中腰になって再度顔を除き込む。するといきなり何か思い付いた様な顔になり、僕に背を向けて座った。

えーと、これはまさか……おんぶ？

「どうしたの？ ほら早く」

顔を背けたまま、手招きをする裕璃ちゃん。いや、僕としても男のプライドっていうものがあるし、それにこれから買い物もしなきゃいけない。

おぶって貰って買い物を済ませました。なんて父さんにバレたら地獄なんか生温いぐらいの罰を受けかねない。

「あの、裕璃ちゃん。せつかく何だけど、僕立てるから大丈夫だよ」裕璃ちゃんが振り返ったのを確認してから、立ち上がって見せる僕。ただ足は小刻みに震えてるけど。勿論それを裕璃ちゃんが見逃すはずもなく、にやにや笑いながら僕に近付いて来る。

「痩せ我慢は感心しないなあ。周？」

そう言って無理矢理おんぶする裕璃ちゃん。

「ゆ、裕璃ちゃん！？ 僕、断ったよね？」

肩を叩いて抗議する。ただ単におんぶを抵抗すればいいだけなのだが、僕の体に抵抗する元気なんて今は無い。

「断ったよ」

至極当然かと言うような口調で答える。いや、断ったから当然なんだけどね？

「じゃあどうして？」

まだ少し混乱している脳をフル回転させて疑問を口にする。

「周の意見なんてしーらない」

そんな僕の脳の頑張りを見事に無駄にするかのような言葉を放たれる。

ちくしょう！ 僕の頭の苦勞を返せ！

「いいから下ろしてよ」

溜め息混じりに抗議する。何か今日溜め息つく事多いな。

「以下同文」

裕璃ちゃんが言った一言で僕の抗議は終わった。

「ほら、さつさと帰るよ」

と言って僕の家に向かおうとしたという裕璃ちゃんに耳に息を吹き掛けて制止する。

「ふにやにやにや！？」

裕璃ちゃんの肩をしっかりと掴み、振り落とされるのを防ぐ。

「ななな何するのかな？ しし周？」

凄い速度で首を捻り、すぐ横にある僕の顔を紅潮した顔で見る。

「人の話を聞かない子へのお仕置きです」

ふっふっふ。仕返しは成功したようだね。きっと今の僕はとびっきりの笑顔になっているだろう。

『……周のおバカ、でもそんな所も……好きだよ』

すぐに顔を戻し、まだ紅潮が収まらない顔で、ボソツと何か呟いた。そういうのは勿論気になる訳で……

「何て言ったの？ 裕璃ちゃん」

甘い言葉を言う様な感じで、耳元で囁く。

「何でも無いよ！ 何でも！」

紅潮にさらに赤みがかかり、少し心配になる程顔が赤みがかっていた。いくらからかったと言ってもここまで赤くなるなんて……もしかしたら体調悪いのかな？ でも会った時は元気そうだったし……どうしてだろう？

「そ、そういうええ周はどこにいくの？ いつもなら家に居る時間だよね？」

話題を変えようと必死な裕璃ちゃんに少し苦笑する。いつも家に居る時間と言っても今は五時ぐらいた。改めて父さんが厳肅だということがいかが思われる。

「これから買い物なんだ……」

父さんへの憎しみと買い物に行く落胆が綺麗に混じった声で答える。

「あれ？ 珍しいね。周のお母さんが買い物をお忘れなんて」

何故うちの家庭事情を知ってるかはスルーするとして。そう、母さんが買い物をお忘れなんてかなり珍しい。どれくらい珍しいかと言うと、表参道を歩いていたらモグラを見掛けるくらい珍しい。

「そうなんだ。母さんが珍しいよね。そういう訳で下ろして」

買い物に行くという訳ならさすがの裕璃ちゃんも下ろしてくれるだろう。おんぶして一緒に買い物に行くなんて言い出す人はいないは

「じゃあ、おんぶしててあげるから一緒に行こうよ！」

考えが甘かった。どうやら裕璃ちゃんの行動を読む事は僕にはまだできない所業だった。

「いや、裕璃ちゃん。よく考えて、女の子が男の子をおんぶしながら買い物をするってどんな風に見られると思う？ 下手したら噂になっちゃうかもよ？」

恐らく奇異の視線を四方八方から受けるはめになるだろう。僕としてはそんな事ごめんこうむる。それに裕璃ちゃんだって僕と噂になるなんて嫌だろうしね。

「う、噂？ で、でも周となら噂に……モゴモゴ……」

やっと引いてきた顔の赤みも再び戻ってきてしまった。それに後半何を言ってるのかわからなかったし。まあ、いつか。

「ね？ 嫌でしょ？ だから下ろして」

これで下ろしてくれるはずだ。多分、いやきつと。少し不安があるけど大丈夫なはず。

「このまま買い物しよう！ うん！ それがいいよね！」

不安は見事に的中した。駄目だ、これ以上僕には策が思い付かない。

「……じゃあ、よろしく頼むよ……」

ほんの少しの落胆と、裕璃ちゃんに迷惑をかける罪悪感でまた溜め息をつく。

「任せといてよ！」

そう言つてスーパーまで走り出す裕璃ちゃん。ふと見たときに顔がにやけてたのは気のせいかな？

大きい買い物袋をぶら下げて、なおかつ僕をおんぶしながら僕の家に向かう裕璃ちゃん。一体その細身のどこにこんな力があるのだろうか。

「……着いたよ」

気付けば家の前、何故か口惜しそうな顔をしている裕璃ちゃんを不思議に思いながら、下ろして貰う。

「今日はありがとう。凄く助かったよ」

自分ができる最大級の笑顔でお礼を言う。正直な所本当に助かった。裕璃ちゃんが居なければ僕は地面に突っ伏したまましばらく帰って来なかったと思う。

「いいんだよ。気にしないでね」

裕璃ちゃんも笑顔で答える。気にしないでって言われてもな……やっぱり恩返しがしたい。うーん、あ、そうだ！

「週末空いてるかな？ もし良かったら一緒に映画でも見に行かない？」

丁度この前裕璃ちゃんの見たいって言つてた映画を思い出した。うん。これならきつと喜んでくれるはずだ。

「い、一緒につてそれつてもしかして、デ、デートじゃないかな？」
デート？ デートつて確か異性と会うことがデートだから……

「うん。デートだよ」

自信たつぷりの顔で返答する。きつと間違つてないはずだ。

「じゃ、じゃあ週末空けておく」

俯きながら答える裕璃ちゃん。今までのを見るとやっぱり体調悪いのかな？

「大丈夫？ 裕璃ちゃん？」

顔が上がったのを見計らって、おでことおでこをくっ付ける。熱は無いようだね。頭かどこかが痛いのかな？

「ただ大丈夫だから！ また週末、じゃあね！」

買い物袋を置いて、脱兎の如く行ってしまった。どうしたんだろう。でもあれだけ走れるならきっと大丈夫だよな。

買い物袋を手に取り、玄関を開ける。そこには鬼も吃驚するぐらいの形相をした父さんが腕組みをして立っていた。

「周？ 俺は買い物をしてこいと言ったが、人の手を借りると言っただけは無いぞ？」

しばらくはバレないと思ってたのに……僕は父さんを侮っていたみたいだ。

「さっきの練習内容を五回やれ。そうすれば飯を食わせてやる。勿論飯はいらんからやらないという選択肢は無いがな」

「……はい」

僕はいそいそと靴を脱ぎ、練習場に向かう。筋肉痛、週末までに治るかな……

周の過去 5 過去？ 裕璃（後書き）

ラブコメって書いてて楽しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8684/>

ゲームの中で

2011年10月7日08時17分発行